

# 四倉新報

發行日 二回  
每月 一日 十五日  
編輯 小林庫二  
本報 發行所 四倉新報社  
本報 印刷所 四倉新報社  
本報 印刷所 四倉新報社  
本報 印刷所 四倉新報社

## 創刊の辭

主幹 小林庫二

今日を期して本紙を創刊する。背景に何もものない。全くの白紙である。新聞事業の經營困難なるは今更贅言を要しない。而も現下の警城は恰も封建時代の群雄割據の如き有様を以つて新紙は對立して居る。その中に政黨、財閥の擁護なく、孤立無援、徒手空擧の本紙を加ふるは、猛獸の中に伍する小羊の觀あつて聊が心細さを感じざるを得ない。而れども本紙はあくまで、社會の公器たる本領を没却せず、嚴正公平なる正義の筆劔を掲げて、事件の真相を把握し、事實の眞諦を批判し、公正的確なる報導をなさんとする。苟も所信に向つては、物質や情實を排し、私心私情を去り、冷靜なる理性と天地の大道に即して、筆劔折れるまで健闘せん意氣込である。冀はくば石城廿萬の郡民諸賢、平三萬の民衆諸賢の熱切なる而も理解ある賛援の程を。

## 戸數割家屋税の制限率引下げ

地方税法改正の結果

地方税法改正の結果、同法施行勅令中に規定の戸數割は廢止されて市町村の特別税となり、新に府縣の家屋税が創設され市町村はこれに附加税を賦課し得る事となり、更に今年度から増額された義務教育費國庫負擔額三千萬圓のほとんど全額が地方税の負擔軽減に充てられることとなるので、内務省ではこの機会に地方税の負擔軽減のため、家屋税の制限率を引下げる事に決定し、目下地方局に於て審議中であるが、その制限率は大体次の如くである。

### 戸數割

一 都市の賦課する戸數割賦課總額は市税總額の百分の四十五(従來百分の五十二)

### 家屋税

一家屋税の市町村賦課率は本府縣税の百分の五十とし戸數割に代ふるに家屋税を以て徴收せんとするもの

## 社告

日本畫の獨立大家安藤廣吉畫伯は本社の創立を奨賛せられ特に毎號漫畫を寄稿せらる、次號より掲載し紙面を彩る可く御愛讀あらんことを。安藤畫伯は東京美術學校出身の秀才なり

## 四倉新報社

## 實説

## 八百屋お七

芳月

行つた江戸の人心は、只も火宅でもあつた。もう八ッ強い色彩とあつた。刺戟過ぎた頃であつたらう。罪を味はうとして喘いでゐた。さうした人たちに、この美しい若い女の火刑が、ごん引廻しの一群が、品川の街道を八つ山下から鈴ヶ森まで静かに進んで来た、裸馬に縛りつけられたお七の白い肌へからまる蛇のやうな眞紅の炎……白煙と紅炎のなかに盛りたる春を無認められた、白顔の上に無雑作に束ね巻きつけられた黒い髪が麻のやうに、散つてゐた。長い睫のなかにうっとりとした黒目勝のかげに、うっとりとした沈んで、只だ當も無く見開かれて居る幾度か戀の熱愛に震へながら愛する吉三に與へられた愛の紅い口唇も今は紫に變つて死の影におぼれてゐる。でも、其のうらたけた顔、あらわに剥き出された白い肌、ふいふいかな胸の肉付き、それは、若い女としての美しさを失われぬなかつた。早熟した女である事も頷かれる、死の門出にひたひたと近づいて行く、このうら若いお七の姿を眺めて、流石に群集の聲を呑んだ、「氣が狂つて見た事なんぞせうになア」見物の或男が、思はず左う呟いた。「また明けて十七日だつて云うやありませんか」誰かが又……うらんだ聲を出した。「さうですつた……あれがもう一ツ年弱で去年十五だつたら助かるた。(次號につづく)

## 第五拾營業報告

### 貸借對照表

資本金	三〇〇,〇〇〇.〇〇	諸積立金	二〇,〇〇〇.〇〇
負債ノ部	九三,五七六.三五	諸預り金	三〇,七二二.〇〇
現金	二七,五九六.四〇	他店借	三三,〇〇〇.〇〇
預ケ金	一三,〇七〇.〇〇	借入金	三三,〇〇〇.〇〇
有價證券	三,九〇〇.〇〇	未拂配當金未拂利息	一,八五二.七五
營業用什器	一,三〇〇.〇〇	第二種所得税	二四,八〇〇.〇〇
他店へ貸	九二,九七〇.〇〇	及資本利子税	三,〇〇〇.〇〇
諸貸付金	七六,六五三.三〇	当期純益金	三,〇二一.七〇
拂込未済資本金	〇〇,〇〇〇.〇〇	計	九三,五七六.三五
他店へ貸	九二,九七〇.〇〇	利益金處分	
有價證券	三,九〇〇.〇〇	当期純益金	三,〇二一.七〇
營業用什器	一,三〇〇.〇〇	之うち處分スルト左ノ如シ	
他店へ貸	九二,九七〇.〇〇	法定準備金	一,五〇〇.〇〇
諸積立金	二〇,〇〇〇.〇〇	賞與金	九〇〇.〇〇
諸預り金	三〇,七二二.〇〇	配當金	八四六.〇〇
他店借	三三,〇〇〇.〇〇	(年七分六厘ノ割)	
借入金	三三,〇〇〇.〇〇	後期繰越金	一,七五五.六〇
未拂配當金未拂利息	一,八五二.七五	右 通 候 也	
第二種所得税	二四,八〇〇.〇〇	大正十五年七月	
及資本利子税	三,〇〇〇.〇〇	株式會社	
当期純益金	三,〇二一.七〇	磐城實業銀行	
計	九三,五七六.三五	取締役頭取 馬目太平	
利益金處分		専務取締役 鈴木辰三郎	
当期純益金	三,〇二一.七〇		
之うち處分スルト左ノ如シ			
法定準備金	一,五〇〇.〇〇		
賞與金	九〇〇.〇〇		
配當金	八四六.〇〇		
(年七分六厘ノ割)			
後期繰越金	一,七五五.六〇		
右 通 候 也			
大正十五年七月			
株式會社			
磐城實業銀行			
取締役頭取 馬目太平			
専務取締役 鈴木辰三郎			